

「体言止め」を再び考える

第1467回放送用語委員会が、10月6日に放送センターで開かれた。外部委員として、作家の清水義範氏と、元日本大学教授の荻野綱男氏が出席した。NHK側からは、首都圏放送センター、長野、新潟、甲府、横浜、前橋、水戸、千葉、宇都宮、さいたまの各局が参加した。当日の議論を報告する。

1. 「体言止め」とは何かを考える

- ①それから**30年**。ブームは去り、街はひっそりと静まりかえっています。
- ②家族や友人との旅行が好きだったという○○**さん**。
- ③乗っていたオートバイは原形をとどめないほど**大破**。
- ④さらにVR、バーチャルリアリティーの技術を使って、○○市の町並みを**再現**。

上記①～④は今回、議題になった3つの番組にそれぞれ使われていた「体言止め」(下線部分)の例である。「体言止め」は、これまでもよく用語委員会で議論されてきており、最近でも、第1462回放送用語委員会(大阪)で取り上げた(参照:『放送研究と調査』(以下『月報』), 2023年3月号, p.90)。

「体言止め」は「名詞で文を終わること」(『新選国語辞典第10版』(2022・小学館))を言う。和歌など韻文で多く使われる修辞法で、言い切りの形になるために、余情・余韻を持たせることができる。

同様の表現法は、韻文だけでなく、書きことば、話しことばでも使われる。その場合にも同様の効果があるほか、体言を際立たせることができる。

放送でも表現方法のひとつとしてよく使われている(参照:『月報』1992年4月号, p.59)。過去の

放送用語委員会による指摘を調べると、スポーツ中継などで使う場合には、テンポも出て聞きやすいという意見がある(参照:『月報』1982年2月号, p.54)。

このように「体言止め」は必ずしも否定されるものではない。その一方で、効果的に使うことが大切であるとの指摘もされている(参照:『月報』2018年6月号, p.101など)。放送では、くり返し「体言止め」を使うことがあるため、それではせっかくの修辞効果が薄れてしまうことも多い。

今回の用語委員会でも、議題になった各リポートで「体言止め」が数多く使われていた。委員会の席上、どういう「体言止め」は許容できるのか、また、どういう場合には言いかえたほうがいいのか、といった目安について説明があった。

①②は、時間や人名といった動作性のない名詞で文を止めている例である。一方で、③④のような例は、サ変動詞(大破する、再現する、説明する、など終止形が「○○する」という形になる動詞)としても使われる動作性のある名詞を使っている。前者は類例が多く、「体言止め」にしても伝わりにくいということはないが、後者の場合は、動詞として使ったほうがわかりやすくなる。

③大破。

→大破しました。あるいは、壊れました。

④再現。

→再現しました。あるいは、作り上げました。

「体言止め」に似ている例として、「名詞+助詞」で止めるような文についても指摘があった。助詞で止めずに、動詞で文を終えたほうがわかりやすく、ていねいだろう。

リフォームには、○○さんの**強いこだわり**が。

→～強いこだわりがありました。

2. 「最短ルート」は距離か時間か

100人の学生に体験してもらい、バルーンを目指して**最短ルート**で避難できるのか、検証を重ねています。

議題のレポートでは、海沿いの地域で、地震のあと津波がくるまでに8分しかないことを述べており、例文では、バーチャルリアリティーの映像の中での実験について説明している。バルーンがあがっている避難場所に着くのどのぐらいの時間がかかるのかを計るというものである。

「最短ルート」というと、距離のことなのか、時間のことなのかがわかりにくい。この場面では、避難場所にもっとも「はやく着くルート」ということを言うべきなのではないか、という指摘があった。

「バルーンを目指して、もっともはやく避難できるルートの検証を重ねています」などとしたほうが伝わりやすい。

3. 漢字表記について

放送では、常用漢字表を原則として漢字を用いている。こうした漢字表記の原則についての指摘や質問があった。

YouTubeでも**廢墟**ツアーじゃないけど、〇〇はこんなになっちゃったみたいなのが多くて。

(略)

ファンシーって当時のものを**紐解いて**いくとやっぱりちょっと薄い。

画面テロップでは、「廢墟」「紐解く」という表記を使っていたが、NHK(『NHK漢字表記辞典』参照)や新聞各社(『新聞用語集2022年版』参照)、通信各社(『記者ハンドブック第14版 新聞用字用語』参照)では「廢虚」「ひもとく」という表記を使っている。

「墟」は常用漢字表に掲載されていない漢字(表外字)であり、放送では使わない。そのかわり同音の漢字「虚」を使い、「廢虚」と書く。

「ひもとく」は「繙く」「紐解く」の漢字表記が考えられるが、「繙」「紐」は表外字であり、放送ではひらがなで表記する。

なお、席上では、「街・町」の表記で迷うという

質問もあった。「[異字同訓]」の漢字の使い分け例(報告)(2014、文化審議会国語分科会)では、「町」「街」を次のように使い分けている。

【町】行政区画の一つ。人家が多く集まった地域。

【街】商店が並んだにぎやかな通りや地域。

新聞・放送も同様の使い分けである。

「まちづくり」という場合、人家が集まった場所ににぎやかな活気を取り戻すというように「町」「街」のどちらの意味も含めた使い方をするところがある。その場合には、無理に漢字を使わず、ひらがなで「まち」「まちづくり」と表記することもできる。

漢字で書ける(常用漢字表に掲載されている漢字だ)からといっても、無理に漢字で書かずに、ひらがな表記でもよい。このことを考慮に入れて、放送での表記を考えたい。

4. インタビューのことばと画面テロップのことば

身を守るための**最善な**行動をとれるような仕組みというのは、町の中に必要になってくる。

例に示したのはインタビューの内容を画面テロップにしたものである。

委員から、「最善」は名詞であり、テロップに出すのであれば「最善な」(形容動詞)ではなく「最善の」(名詞+助詞)としたほうがいいのではないかという指摘があった。

インタビュー内容を画面テロップに示す場合、必ずしも、話しているとおりに書くわけではない。例えば、「見れる」のような「ら抜きことば」を「見られる」に直したり、「すごいおいしい」を「すごくおいしい」に直したりする(連用修飾の場合は「すごく」が伝統的)ことがある。

画面テロップには耳で聞く情報を目でも補助する役目がある。そのため、国語辞典に掲載されている品詞に即した使い方、あるいは、伝統的な文法の用法に合わせて示したほうが、多くの視聴者に理解しやすいと考えることもできる。

山下洋子(やました ようこ)

第1467回放送用語委員会(関東甲信越)

【開催日】2023年10月6日(金)

【出席者】清水義範氏、荻野綱男氏、
佐々木貴志 首都圏局コンテンツセンター長、
渡辺健策 放送文化研究所長ほか